経営学と「行為的主体存在論」

—— 山本安次郎教授の「反論」を考える ——

裴　　富　　吉

昭和 54 年 10 月

論　　集　　第25号（商経編）別刷

札幌商科大学

経営学と「行為的主体存在論」

—— 山本安次郎教授の「反論」を考える ——

裴　富　吉

目　次

Ⅰ はじめに
—論理と感情，理論と情感，理性と感性—
Ⅱ 論争と弁明
Ⅲ 理解と誤解
Ⅳ 社会科学者の学的任務
—社会科学としての経営学—
Ⅴ むすび

Ⅰ はじめに

—— 論理と感情，理論と情感，理性と感性 ——

本稿は，過日，山本安次郎教授より筆者へ返された，筆者の山本経営学説の解明作業に対する「反論」[1] を，さらに筆者が考究するために書かれた論稿である。

筆者は，みずからの学問的関心において喚起された，山本安次郎——以下，敬称を省略する，学問上の取り扱いゆえ，十分諒解されるところと考える——の学説理論に関する追究として，何度か重ねて検討を加えてきたつもりである[2]。今回，山本から本格的な批判的「反論」を拝受しうるという幸運にめぐりあえた。感謝すべき出来事である。当然，筆者としては，山本との学的交渉に対する受けとめ方として，山本の方での，「今や老いて論争をしたり，論争に参加する気力もない」[3] という告白を聞きながらも，なお，今一度，もう少し本稿において相手になってもらいたく願う者である。

山本は，筆者への「反論」を行なっている同稿の最終叙述部分において，富永健一の一文を引用し，社会学畑における話の例のなかに，なんらかの含意を汲みとろうとしている。こういう。それは，高田保馬とT．パーソンズの評価に関していうもので，日本の社会学には，傑出した人が出ると，その学説にオーソドクシーとしての合意を与えずに，逆に足をひっぱる悪しき伝統がある。建設的な批判をしないで，ただ「誰々はだめだ」と宣言することによって，これをほおむり去ろうとする性向がある。こうして傑出したものをひとつひとつ，つぶしてしまう結果，あとには小人のなぐさみごとばかりが残り，小さな家が建ってはこわされる無限の不毛がつづく。このようなことを，これ以上つづけてはならない，評価すべきものには正しい評価を与えようではないか，と[4]。

山本は，筆者の山本学説に対する解明，批判が，そのような富永の一文で意味される事態に

類似ないし酷似する内実を有するとの受けとめ方から，当然，その引用をしたものと推察される。それゆえ，山本は，筆者の論調ならびに基調は，同一とするも論文と書評と覚書では大分異なり，しだいに感情的にさえなっている。またその評価も肯定的から否定的へとでもいえるように変わった[5]，と究明を受けた側の被対象者としての所感を述べている。

この山本の意見は，論理の運び方に関して，大変興味ある内容展開上の分別問題を含んでいる。というのは，筆者の山本への評価が，「しだいに感情的にさえなっている」→「その評価も肯定的から否定的へとでもいえようか」と変化しているとの指摘で，筆者〔裴〕の論調＝理性的から感情的へという変容と，山本に対する評価＝肯定的から否定的へという変質との，対応関係〔論調と評価の〕を示唆するかのごとき部面があり，いささか当該の論者による独想的裁断のきらいないし偏向的解釈を，察知しないわけにはいかないからである。これはあくまで仮想上の話であるが，あたかも筆者が「しだいに感情的にさえなって」も，もしも，山本への「肯定的」評価がそのまま持続していれば，すなわち筆者の山本評価が肯定的のままにとどまり，変化しなければ，山本をして，筆者が「感情的」である，といわしめる結果になったかどうか，大いに疑問が残るかも知れない，ということを考えてみたくなるのである。

山本は，西田哲学によって経営学の本質論的な基礎理論の方法をささえる経営哲学，経営学哲学を考えるようになってから，今回の「反論」論文の時点で，およそ38年になる。その間，裏切られたことはない，と述べる。しかしながら，このような自己の経営学の立場に対する絶対的確信感・自負の念は，山本個人のものであっても，当該学会の人士すべてが――もちろん筆者も含めて――，必ずしも残らず，認めうるものとは，とてもいえない，という心もとない状況のなかでの，それである。したがって，山本が述べるその学問上の信念はどこまでも相対的に取り扱われる必要がある。その事由は，とたずねられれば，そのためにこそ，「論争」や「対話」が要求されることになる，といっておけばよいだろう。

この度の山本論稿「経営学と哲学との関連について」は，その副題に付けられた「裴（助）教授の批判に答える」〔カッコ内補足は裴〕という名称からただちに判明しうるように，山本が筆者へ，直接に「論争」を返し，反「批判」を試みたものである。随所で，山本は，筆者の論究に対してはそれなりの評価を与えながらも，基本的な方向としては，こう論難する。列挙しておく。「強引な解釈や結論」[6]，「見当違いも甚だしくなる」「短絡的思考むしろ乱暴さ」，「一論ごとに辛辣の度を増し，感情をむき出しにし，その強引な論評は，何のための論評か，全体を通じて見た論調の変化にただただ驚ろかされ唖然たるのみというほかない」[7]。「その書評や書評的覚書は辛辣を極め果し状にも比すべきもの」[8]。「私の経営学説についての読みが浅く，その理解が十分でなく，時には恣意的な解釈さえ試みる。……一面観に終っている……。見当違いの批判には迷惑する」[9]。筆者がする，山本へのある論難に対しては，それに，筆者が「得意になる程度……。全くお気の毒というほかない」「的外れ」[10] であるといい，また他の

論者からの山本への批判——ここでは池内信行をさす——の「言葉を鵜呑みにするほど滑稽なことはあるまい。よく読み，よく比較して見ることである」とし，そのほか，「真面目に答える気にもなれない」[11]，「落ちついて冷静に再読三思を乞いたいのみ」[12]，「冷静に問題自体に立帰って考えてみて欲しい」[13]。助「教授はまだ若いのだから，拙著，拙論も慌てないで，もっとじっくり落ちついて，謙虚に読んで理解して欲しい」[14]，とも述べ，今回の筆者の「挑戦に答えて見て，論争というべく余りに貧弱であり，不毛であったことを悲しむ，それは争うべき裴(助)教授の立場らしきものが明確でないからである。この論争にならぬ論争——批判に対する弁明ともとられる論争——を通してでも裴（助）教授の立場の自覚が高まり多少でも経営学理論の進展に貢献できれば幸としなければなるまい」[15]〔カッコ内補足は裴〕，とむすぶ。

以上，筆者なりに捕捉した，山本がする筆者に与える論難叙述部分は，筆者のつたなさ，いうなれば「若さ」ゆえに生じているとするもので，山本がいう，筆者の山本理解における不十分さを，山本側から反批判し，反駁する内容ないし底流としての，山本の基本的論調を，端的に表わしているとみなしてよい諸個所からの引用の列記である。山本が，自己が保持するという経営（学）の立場の高みに立脚して，他者の論説や論評を睥睨し，位置づける，独自の境地を，そこにかいまみることができる。

筆者の側における一般的な話として，感情が舞いおきる心的営為現象をもって，これを論稿をしたためるための発条（スプリングボード）にしえた経験は度々もっているが，それは，しょせん論理を論理化するためのきっかけ，導火線にしかすぎず，そのために冷静さを欠いた状態のままで，山本のいう「経営の立場」を分析，解明したことがあったなどとは，まったく考えていない。それは，ただ確かに発奮の材料にはよくなる。学問的な「立場」がちがえば，——もちろんこのことは山本もいっているように——異見が生じ，見解の衝突が起こるのは，誰にいわれるまでもなく，あまりにも当然かつ必然でもあることがらである。そこでは，相互の理解において理論上，論理上の齟齬をきたすことなどは，日常茶飯事としての事件になろう。だから，相互が「対話」をし，「論争」を行ない，ときには「対決」も避けえず，また「対立」も余儀なくされる場合もある。自己の主張——論旨ではない——が十分に理解されず，思うようにならないからといって，今回のような「論争」は必要としながらも[16]，この事態をいみきらい，当事者を厄介視するような，他者への「反論」の方法は，尋常さにおいて疑念なしとしえない。論理と感情は表裏一体のものだからこそ，その意識的識別はむつかしい，それゆえまた，両者の認別をなす努力が強く要請される。理論と情感ははなちがたいものでしかないゆえに，理論展開の仕事においては情感を，あえて意図して押え，殺してかかる必要がある。なによりも感性を十分に制御した上で，これをねり上げ，理性として活かす学問的方途が，ねばり強く追求される，といっておこう。

筆者は，この度の山本の「反論」論稿をもっぱら本稿の問題対象にするが，あえていうなら

この「論争」に結着をつけようなどという大胆な考えは有していない。筆者と山本の，今日までの，まがりなりにも形成しえてきた「対話」を，注記中に掲げてある，山本学説関係の論稿の，注２）④「書評的覚書」における結末部で述べたように，第三者にむけ，客観的かつまた学問的な次元での認識による理性的判断領域において，問いたいと考えるだけである。

注

1）山本安次郎「経営学と哲学との関連について―裴教授の批判に答える―」，亜細亜大学『経営論集』第14巻第２号昭和54年３月。

2）筆者の山本安次郎の学説に関する研究論稿は，つぎの四稿である。

①「日本の経営学説の解明―山本安次郎教授の経営学説―」，中央大学大学院『研究年報』第２号昭和48年３月。拙著『日本の経営学』（河西，昭和52年５月）第２章に収録。

②「西田哲学と日本の経営学説―山本安次郎教授の経営学説（続）―」，財団法人朝鮮奨学会『学術論文集』第３集昭和48年11月。『日本の経営学』第３章収録。

③「書評 山本安次郎『経営学研究方法論』」，札幌商科大学・札幌短期大学『論集』第17号昭和51年５月。本稿では，「書評」と略称。

④「≪山本安次郎『日本経営学五十年―回顧と展望』≫に関する書評的覚書」，同『論集』第21号昭和52年11月。これは，「書評的覚書」と略称。なお，本稿でもっぱら問題にする山本「経営学と哲学との関連について―裴教授の批判に答える―」〔傍点は裴〕の論題のなかで，副題にある筆者の職名は≪助教授≫なので，注記しておく。山本安次郎『日本経営学五十年』（昭和52年４月，200頁脚注）で筆者の姓≪裴≫が≪斐≫であった点は，今回訂正してもらえた様子であるが，いずれにせよ，「一階級」ながら特進の扱いを受けたことは，大変名誉と考えたい。筆者の姓は，よく誤記される場合が多いゆえをもって，そのことのときには，特別の所感はなかった。しかし，だが今回は，若干，異なった印象を受けざるをえなかった。

3）山本「経営学と哲学との関連について」183頁。

4）同稿，183-184頁。　5）同稿，172頁。　6）同稿，159頁。　7）以上，同稿，160頁。

8）同稿，161頁。　9）同稿，174-175頁。　10）以上，同稿，176頁。11）以上，同稿，177頁。

12）同稿，180頁。　13）同稿，181頁。　14）同稿，182頁。　15）同稿，183頁。

16）同稿，182頁。

II 論争と弁明

筆者は，第52回日本経営学会全国大会〔昭和53年９月，早稲田大学〕における研究報告の発表の席で，ある質問者から筆者の立場はいかにあるか――変革理論はなにか――を問われ，その場では，正直に「今のところ特別ない」と返答しておいた。このような追求は，質問者自身の立場を明示し，開陳しつつ，他者への問責がなされるべきものと考えるにせよ，ともかくその理由をいうなら，特定の信条や思想，哲学からする，なんらかの経営学の立場に関する質問がそれである，と筆者が受けとめたから，そう答えたわけだが，経営学をいかなる学問ないし理論的立場として理解するか，というところまで，筆者が考えていないわけではけっしてない[1)]。

日本の経営学会に関する話としても応用しうる，ある識者の意見が，ここにある。先般，開

催された≪経営史学会≫の場において，その識者が研究発表報告を行ない，その後の発表論旨のとりまとめにおける「付記」で，つぎのように述べた事態が，これまた経営学会にもかなり浸透している状況にあることは，あながち否定しえない側面であろう，ということである。

私を愕然とさせたのは，……日本の他のいくつかの学会に見られるサロン的傾向，学者的モラルの喪失，知的頽廃，こうしたいまわしいものが，「報告者の報告を読みもしないで発言する会員」という形で，私たちの学会にも入り込んでいる……。同学者の論文，報告を読みもせず，聞きもせず，自分の「研究成果」を発表して自己満足にふけるところには，知識・アイデアの交流も，きびしい学問的相互批判も成り立たない。知識・アイデアの交流や学問的相互批判のないところには，学問の進歩がありえないのはもちろんだし，第一，学会の存在理由がなくなってしまう[2)]。

この意見と，今回の「反論」論稿において，山本がいうところとを比較してみよう。

異なる理論が並存するとすれば，互いに比較し批判し，より深い理解高い理論を求め，論争を通して切磋琢磨する必要があろう。……わが国の学界ではそのような論争が比較的少ないように思われる。学派内の論争は激しいようであるが，学派間の論争は割合少ない。学問の進展のためには，このような論争こそが必要であると思われる[3)]。

異なる理論の並存による相互の学問的批判において，見解の食いちがいや，誤解の介入は不可避であり，その完全な除去も，なおさらのこと，難題である。もちろん，そうなればよいなどというのでないことはいうまでもない。だが，今回の山本「反論」に関しては，論者同士の「対話」や「論争」が，かりに，必然的に調和しえ，論旨や結論の共約化，一致と大同団結を，めでたくも結果しうるとするならば，日本の経営学会の話に限定するに，ここでは，山本理論一本でこと足れり，とする，これで完結する，という論調があることを感じないわけにいかない，といっておきたい。山本学説は，世界に冠たる経営哲学であり，経営学哲学である，「西田哲学」に依拠する事由からして，そうならねばならない強固な存在理由があるらしいので，かくいえるのだろうか。

最近の，当該学会における統一論題に関連した，ひとつの著作として，西田耕三『日本的経営と働きがい』（日本経済新聞社，昭和53年）という書物があるが，この近著への評論を与えたある論者は，その書評中で「あくどいまでの学界攻撃はどんなものであろうか」[4)]，と懸念を投げかけていた。そこで筆者は，さっそくその該当個所をさがすべく――このために同書を読んだということではないが――，一読してみた。散見される，その論者〔北野利信〕が懸念し

ている論述対象の個所をさがしてみたところ，以下の諸例があった。

「間（宏）の本をくりかえし読むにつれ，彼の主張にはどうもすっきりしないところがあると思うようになった」[5]〔カッコ内補足は裴〕。中根千枝の名を高らしめた著作の内容については，「さも新発見，新事実の指摘であるかのようにいう」[6]。中根の近著に対しては，「彼女の議論の新鮮さ――と思えるもの――は，主として，使われることばの新しさにある」[7]，「中根自身のしかつめらしいことば」[8]，というふうに述べている。そのほか，「紹介学者」[9]。「一人の実務家あがりの学者……岩田龍子（女性ではない）」[10]。「学者連中」[11]。「アメリカかぶれした学者連中」[12]。「知性あふれていると目されている学者連中の実態をながめていると，知性への……期待も，ともするとゆらぎそうだ」[13]。

引用に及んだ著作が≪新書版≫である事実を大目にみたとしても，この西田耕三のいいっぷりにくらべて，筆者〔裴〕の山本学説に対する「批判」諸論稿と，山本の今回，筆者へ「反論」をする批判論稿とは，どちらが，その内容叙述，核心の主張において，より論述的か，上の西田からの引用文の調子と十分に比較してもらえれば，幸甚である。前節で若干，その基調をかいまみたように，山本の「反論」のあり方は，自己の立場・学説の擁護と保守に急なあまり，他者に対する批判・論難にあって，理論的学問的寛容度を欠いているきらいがある。上述で引用した西田の比ではない。筆者の山本批判における論述表現は，誤解との反撥はともかく，論点を，また主張を，論理的に表象させる範囲内で，最大限の修飾を加え，工夫したものであるのに対し，山本の筆者への反駁の論調は，理論的主張をこえ出て，感情的追辞をそえてある形になっている感が強い。

やはり近著として，諸井勝之助・土屋守章編『企業と社会』（東京大学出版会，昭和54年）がある。この著作はコンファレンスの実施とその成果の刊行という特徴をもつ。そこでの報告書とコメンテイターのやりとりを，しかと観察するとき，筆者の山本に対する――今回の山本「反論」が提出される以前までの――論評などは，山本自身が筆者にむけていうような批難は別にして，もののかずではない語調である。ところが，今回の山本の「反論」においては，相当の論調の激昂ありと第三者に受けとられかねない危惧が多分にある。当事者双方における異論や相違，すれちがいが，学問的交流として，ある程度ここに，つきまとわざるをえないのは，いた仕方ない事象である。もっともだからといって，それを解消する努力を怠ってよいといえないのは，むろんである。それだからこそ，なおさら，対話や論争，対決が必要となり，これが学問上，理論的に，よりいっそう，客観的な実効性の収穫をめざして巻き起こされるべきところといえよう。

K．マルクスがいったそうであるが，批判 Kritik というものは，これは頭脳の激情でなく

て激情の頭脳だということを，心したいところと考える。筆者が山本学説に与えている究明と批判に，今回の山本「論稿」が返す，論難点である，「短絡的思考」とか「見当違い」，あるいは「辛辣，感情むき出し」，「恣意的解釈，一面観」，「的外れ」，「冷静を欠く」，「まだ若い，慌てないで，謙虚に読んで欲しい」，などという「反論」は，頭脳の激情か，それとも激情の頭脳か，そのどちらでもって，いわれることばなのか，一考に値する好対象となろう。筆者は，山本学説に関する研究解明を実行した諸論稿において，努めてその理論の論理性を理性に訴求する方向で考察を行なったつもりであるが，それが山本の「反論」論稿によって，解釈しなおされ，その上で山本が反批判を導出する段になると，その意図がまったく無に帰すらしくみえてくるから，不思議である。筆者の山本理解において，前節でも関説したごとく，かりにの話だが，今回の山本「反論」におけるような反駁内容と表現語句をもって，筆者に対する批判をしうるとしても，筆者が山本学説を肯定し，同じく西田哲学によって経営学を考究する立場を採用したとすれば，またしかも山本理解としては，「短絡的思考」「見当違い」「辛辣，感情むき出し」「恣意的解釈，一面観」「的外れ」「若い，慌てずに読んで」等々の欠陥が同時に内包されるとして，山本が同じような表現方法での論難をしたかどうか，かなりの疑問が残ろう。とはいえ，山本と同様な立場に立つとする場合にも，同じような論難は与えうるだろう。なぜなら，自説に対する理解不十分，検討不足を理由に，山本からはそう断定できそうだからである。要は，自己の立場，学説以外は，その自信のほどはともかくとして，より正しくないという『絶対基準』の想定が，確信をこめて想定され，前提となっているらしいことで，山本に追随する以外の立場，あるいは同じにしえない立場は，負的評価しか付与しえないのであろう。これではもとより「論争」に真正面から挑めるのか，という不安すら，とても払拭しえない懸念がある理論体質をかかえこむことになろう。

山本は筆者に西田哲学，西田哲学といいながら，解説書や評論だけを読み，勝手な解釈をしたり，見当ちがいの引用をして批評したりで，西田全集を読まないのはどうしたことか。直接読めば味わいも異なるであろう[14]，という。筆者の方からいえば，西田哲学，西田哲学というのは山本の立場の方である。また西田全集を読まないというが，筆者がいつ読んでいないと明言したのか，反問しておきたい。事実に反する。もっとも，事実に反するも反しないも知りえないのに，一方的に確証なしに断言すること自体がおかしいのである。どうして，みえないことまでみえるのか，筆者には不可解なことである。また，解説書や評論〔だけ〕を読んで，そこで勝手な解釈や，見当ちがいの引用があるというが，引用・参照という仕事は論者の評価，「価値」観によって，いくらでも異なり，変わりうる可能性と場合がある。ここには「的外れ」云々とはまた別の問題もある。さらに，西田全集を直接読めば味わいも異なるとの「指南」にいたっては，読書の味覚——学問上の問題としても——には，個人差・個体差があり，ましては，読んでいるといないとにかかわらず，他者より筆者が「読むべし」などといわれ，強制さ

れる憶えは，寸毫もない。もうひとつ。山本の西田哲学〔全集〕の参照法は，山本なりの開眼，悟りを経た，達観による，大ざっぱな全集本単位――たとえば第8巻『哲学論文集 第1』『同第2』という――引用，注記しかなく，それだけよく消化，吸収されて，山本理論のうちに体化しているといえなくもないが，直接の引用参照は「作られたるものが作るものを作る」「行為的直観の立場」ぐらいであり，西田の著作の論述特性はさておき，全般的にいって，学問的でないの一言につきる。この点は，山本が栗田真造の主著〔初版〕に対する書評中で，みずからが示した手本に習って[15]，筆者がする疑問の提起である。ついでにいわせてもらえれば，西田哲学の解説書や評論も読んで悪いことは，もちろんない。大いにそれに励むべき点は，山本もともに反対していないところと考える。

その引用参照の注記明示云々の件について，もう少し，解説を加えておこう。山本が栗田にいった批判内容は，こうである。栗田の弁によれば，山本にこういわれたと述べている。

「自説の主張に急のあまり，他説の引用を略したことは学徒としての見識に不足するものがあるとの批判」[16]。

だがまた，かつて山本は，自著のなかでこうもいっている。

「なお，参照文献を明示しなかった……。もちろん本稿を草するに当っては，問題の関するかぎり，できるだけ広く文献を参照し，これを真に自己のものたらしむべく努力したつもりである。それにもかかわらず，これを明示しなかったのは，それらの文献を無視するがためではなく，一言一句それぞれに脚註するがごとき従来の慣行はほとんど無意味に近き煩労にすぎないと思われるからであるのみならず，とくに本稿の問題のごとき性質のものにおいては，一々脚註するまでもなく，すべて熟知されており，いまさら断わる必要がないと思われるからにすぎない」[17]。

この山本の叙述は，『公社企業と現代経営学』という著書での発言である。同書に対する書評をしたためた池内信行は，この山本の言辞に関して，つぎのような評論を行なっている。

「この書物には参照文献が引用されていない。……学問の研究には特許権はないけれども，本来の共同研究のためや，先輩に敬意を表するためにも文献引用は，望ましくもあり且つ必要である」[18]。

山本から栗田へ，池内から山本へ，裴〔筆者〕から山本へ，という組合わせの関係＝堂々め

ぐりにおいて，引用文献の参照方法や原典明示の問題を考えるとき，少なくとも，山本学説と西田哲学の関連についてのみ話をかぎるとして，ここでは，山本の主張がインサイダーリズム(insiderism)の極限形態である事態，すなわち自己を理解し，自己を知る者は自己のみという個人的唯我論の陥穽まで，あと一歩という状況にあることを，指摘しておく必要があろう[19]。

注

1) 拙稿「経営学方法論序説—経営本質論と経営学の研究方法—」，札幌商科大学『論集』第24号≪商経編≫昭和54年3月。
拙著『経営学の基礎研究』白桃書房，昭和53年。第1編「経営と風土の接点」。
2) 森川英正「日本財閥の経営戦略」『経営史学』第13巻第1号昭和53年10月，〔付記〕51頁。
3) 山本安次郎「経営学と哲学との関連について」182頁。
4) ≪日本経済新聞≫昭和53年12月24日，24面。北野利信による同書への書評。
5) 西田耕三『日本的経営と働きがい』日本経済新聞社，昭和53年，95頁。
6) 同書，121頁。 7) 同書，136頁。 8) 同書，137頁。 9) 同書，132頁。
10) 同書，141頁。 11) 同書，148頁。 12) 同書，159頁。 13) 同書，178頁。
14) 山本，前掲稿，182頁。傍点は裴。
15) 栗田真造『経営構造の類型的研究』(新訂版)，森山書店，昭和54年，〔改訂増補版に転載収録された，山本安次郎「書評」〕330頁上段。
16) 同書，249頁。
17) 山本安次郎『公社企業と現代経営学』建国大学研究院，康徳8年9月〔昭和16年〕，はしがき9頁。なお，文章は現代風にあらためた。
18) 池内信行「紹介・批評 山本安次郎著公社企業と現代経営学」，関西学院大学『商学論究』第27号昭和17年10月，159頁。
19) 新堀通也『日本の学界』日本経済新聞社，昭和54年，134頁。

Ⅲ 理解と誤解

同じ問題，同じ論点，同じ対象を，多くの諸論者が考え，分析し，把握しようとするとき，その保有する立場や視点にしたがい，多様に「理解」が異相を呈し，いくたの異見や見解の相違を生ぜしめる事態は，学問上どうしても避けえないことがらであるといわねばならない，という側面は，学界人のみならずして，万人が認容しうる事実であると考える。

筆者が，「書評的覚書」において，「私なりの氏の経営学説に対する『理解』(『誤解』?)としての解釈や学説研究のひとつのあり方を提示してみただけである」[1]，と述べた個所を，山本は二度にわたり今回の「反論」論稿で引用し[2]，この意味内容から，筆者の山本学説の解明は結論的にとるに足らない内実である，というような心証をえるにいたったらしく，その論調を基底にふまえて，筆者に対する「反論」を行なっている。山本は「経営の立場に徹すること以外に経営学の立場の確立と昂揚はないのである。そうでないと見るなら(裴助)教授の立場がそうでないからであろう」[3]，と断言してやまない。「経営の立場」が経営学の立場になりうることは，なにも，山本自身が一番すぐれている哲学として高く評価する，西田哲学に依らなけれ

ばならない，という具合での，その専売物ではない。おそらく，経営学研究者のほとんどがその立場で，経営という研究対象を考察しようと努力しているものと考える。筆者もその例にもれないつもりである。山本に唯我独尊の傾向がなければ幸いである。

西田哲学の思想性と論理性の分離問題に関して，山本は筆者の考える哲学だけが哲学だとするのは僭越もはなはだしい[4]，と批判する。しかし筆者は，これまで，自分の考える哲学などというものを，残念ながらいまだ披瀝しえないで――正確には築きあげるところまでとても到着しえていないというべきか――いる。この点は，山本が筆者には，経営の立場に関して，「争うべき……立場らしきものが明確でないからである」[5]，という論難とも関連がある。哲学と経営学の，強固で緊密な「組（ペアー）」の間柄において，西田哲学に依拠しつつ，自己の経営学構想を誇示しうる山本の立場から観察して，そう断定できるとするならば，筆者の考えるなんらかの別個の，存在していないはずの「哲学」の存在を具体的に指摘しうるのかも知れないが，なお筆者においては，山本が筆者において存在するかのようにいう――「経営の立場」が不明確という反問をてこにいう――「哲学」，またその不在とは，筆者にとってなにをさし，意味するのか，よく理解できないでいる[6]。

山本は，筆者が，西田幾多郎に対して，精神医学的視点からの考察分析を「西田哲学」に施している，ある見解[7]を引用参照し，これを山本学説の核心に関係させて，「学際的検討」として活用しようとする方針をもってすれば，ここにひとつの示唆が感得できると述べた点について[8]，こう反撥する。「精神病理的にいうのなら，（助）教授こそその適格者ではないのか」[9]，と。その精神医学的分析のいう内容は，西田幾多郎の心理構造は分裂性格であり，そのなかでももっともよい過敏型に属するそれであるとの点を，披露したものである。ここに，山本と「西田哲学」の間になんらかの関連性の所存を示唆してよいのではないか，と筆者が述べた内容について，山本は相当の心理的反撥を感じたらしく推察される。実をいうと，この山本の反撥を筆者はまえもって予測していた。筆者は，西田の性格分析の話題を，心理学的，精神医学的，という場面で取り上げており，山本が反撥するごとく，精神病理的という云々の仕方はしていない。

精神医学的分析を「西田哲学」に施している論者，岸本謙一は，「知能優秀」「精神分裂病の遺伝がかなり濃厚」[10]と診断し，この分析された西田幾多郎の心理（学）的性格が，その哲学――人と学説――に反映していると観察する。この岸本の診断分析は，特別うがちすぎた見方とはいえず，学問的にいってしごく自然な観察法である。と同時に，西田哲学に心の底から感動し，共鳴し，これが経営（学）哲学として，学問的な山本の琴線に触れる何物かがあったとし，その哲学を通しての開眼という体験をえたという山本にとって，上記の岸本の西田に対する精神医学的，心理学的分析による診断が，どのような形であれ，いくばくかの関係を確実に有しうることは，いたずらに否定しえないことといえよう。

ところが山本は，今回の「反論」のなかでの自己診断分析として，自分が「生来学才に乏しく，リズミカルな音楽型（天才型といわれる）ではなく，絵画型か彫刻型（鈍才型または努力型）に属し，ひたすら現実の経営の機能と過程を見つめながら経営学の基礎理論を求めて馬鹿の一つ覚えのように歩み続けて来ただけで」[11] ある，と謙遜しながら，いっている。筆者は，その内容について多大な疑義を抱くが，ともかく，前述のような精神医学的分析の診断を，筆者が考察内容にとりこんだ作業をして，山本に「その書評や書評的覚書は辛辣を極め果し状にも比すべきもの」[12]，といわしめた遠因にもなったのではないか，と考えている。だが，このような，筆者が山本に発した関連問題についての学際的検討としての，別の角度からした「批判」は，より学問的であれと考えつつ，提起し，論及したものゆえ，その結果，たとえそれが「果し状」と表現されようとも，いっこうにかまわない点と考える。望むところである。学問的「果し状」になれば，である。要は，関係論者の受け方，論争に立ちむかう姿勢，態度の問題であろう。

さて，西田哲学の創成者その人である西田幾多郎に関した，精神医学者の岸本による診断分析結果については，西田幾多郎の孫になる，上田　久が，また，大という字をつけてよいと思われような反撥をしている。岸本論文に対して，上田はこういう。

この論文は，遺伝学の立場から西田一族を観察しているが，家族についての具体的な例証に，明らかな間違いや疑問点が何個所かある。……この論文によると，遺伝学的に見て西田幾多郎は異常性格の持主であったという。確かに祖父幾多郎の中にはデモーニッシュなものがあった。晩年には極めて少なくなったとはいえ，若い時代にはややもすれば奔馬のように走り出していくものがあった。だがそれだからといって幾多郎が精神異常であったなどと言えない。家族構成から見て遺伝的に異常な素質があったとしても，直ちに精神異常視することには論理の飛躍がある。（岸本）氏は幾多郎の哲学を「非現実的」と言われるが，私ども近親の者にとっては，幾多郎自身は極めて現実的な生活指導者であった。「西田のお父さん」と呼ばれて，親戚中の相談事を極めて的確に解決し，処置してくれる助言者であった。氏が「西田哲学は分裂性格者の救済の哲学である」といわれるのには首肯し難い[13]〔傍点および補足は裴〕。

この上田の岸本論文の内容への反撥の仕方は，一言でいって肉親の情にかられた，また精神医学，心理学の基礎的素養の明らかな不足に原因する抗弁である。岸本が指摘する問題は，西田の分裂症的性格であって，西田が異常性格そのものである→分裂症の病的悪化症状・精神病〔精神分裂病〕であるとは，けっしていっていない。それも，西田の心理構造は分裂性格であり，そのなかでももっともよい過敏型に属する，といっているにすぎないのだから，上田の前

述引用中における抗言は的をいていない。これをもって，岸本が西田幾多郎を，「異常性格の持主」「精神異常視」しているなどと，邪推し，批難するのは不当な見解である。上田の反撥には，「論理の飛躍」どころか，肉親の「情感の飛躍」すら介在，混入している事実をかぎとることができよう。

クレッチマーが書いた『体格と性格』という本は，そのなかで正常な人を分裂病的傾向をもつものと，躁うつ病的傾向をもつものとの二つに分け，前者を分裂質（分裂気質），後者を躁うつ質（躁うつ気質）というふうに呼び，さらにそういう正常なものと精神病との中間のものを，それぞれ分裂病質とか躁うつ病質とかいうふうに名づけた。だから，分裂質—分裂病質—分裂病，躁うつ質—躁うつ病質—躁うつ病，というのは，ひとつの連続線をなし，この気質と病質の間にははっきりした区別がないという[14]。いうならば，岸本は西田の性格を，気質から病質までの範囲において，その両者の明確な一義的区別をどこかで決定的になしえない，というクレッチマーの知識をふまえて考えるに，分裂質と分裂病質の間にわたる領域で西田の性格特質を分析，診断したにとどまる，と解釈すべきであろう。この点は，上田の岸本に対する，先述で引用した反論中の叙述内容において，まさに反証されている。

ちなみに，前段で参考にした著作文献によるところでは，クレッチマーによる性格型の基底としての体型と天才型の諸関係を示した項目のなかで，分裂質 × 研究者 = 精確な理論家，系統立てる学者，形而上学者——たとえば，デカルト，カント，スピノザ，ヘーゲル，キェルケゴール——とある[15]。ここに山本安次郎を添えて敷衍してみたいが，はたして牽強付会になるだろうか。つけ加えていうならば，遺憾なことに筆者自身の性格質は，むろん天才型などの諸分類は無縁として，今のところまだ，知らないでいる。

要するに，岸本の西田幾多郎診断は，どこまでも学問上の分析であるから，またそう志向する考察内容であるからには，これに肉親の情をもって反撥し，そこで反論を試図しても，客観的にみて積極的な論議としてかみ合う中身はなにも生み出せないのである。まして，西田幾多郎が日常生活において近親者の現実的指導者，助言者であった，という上田の弁解などにいたっては，まったくのすれちがいになるほかない，といえよう。西田哲学に問われている課題は，その哲学の現実面に対しての理論性の関係や対面のあり方であって，西田幾多郎という人物そのものの現実における生活ぶりに直接むけられるそれではない。ここにおいて，次元の異なる「理論と現実」の問題と，「現実そのもの」の問題の混同のすえに，そこに「論理の飛躍」が当の論にあると虚妄し，「肉親の情」で，それを批難しても，生産的な成果はなにも誘導しえないだろう。

学説研究においては，哲学であれ経営学であれ，その人となり，学的経歴なりを詮索する必要が生じる。人と学説の組み合わせで研究が要求されるゆえんが，ここにある。西田哲学に本質論的基盤をおく山本学説が，西田幾多郎の性格分析診断の解明を応用されなければならない

わけは，山本が西田哲学において哲学的開眼を受けたといい，その論理的説明が他者には明示的でも説得的でもなく，わかるものだけがただわかるという「主体」的な主観主義による悟りの境地の独白では，なお第三者に対して十全な立場の理解をえさせるものとはいいがたい，という点にある。

つぎに，山本は，筆者が「書評的覚書」において，日本の経営学会の戦争経験を「皆が戦争犠牲者」と慰撫し，同情する点を批判したこと，つまり「日本・日本人は戦争犠牲者でしかなかったのか，私は問いたい」，と疑念を山本に提起したこと[16]に対して，「大上段に構えて論難する，(助)教授は『問題の限定』ということを知らないらしい」[17]，と逆に，論難する。ここには，日本の社会科学者，いや，日本の知識人の歴史的伝統的通弊ともいえる，思想性の一貫性，ないし節操性に関してぬきがたい問題の所在がのぞける。なにも山本のように，筆者に対して，田辺　元にならって，そんな経営学があるとすれば，「懺悔の経営学」なら気に入るか，これでは，なにをいうのか理解に苦しむ，と強く反駁する[18]必要などは，毛頭ないのである。筆者が，そうした問題側面に論及するのは，「書評的覚書」で引用した，山本がいう「戦争経済から平和経済への転換，これにつれて思想，教育，文化，一切の価値の転換が問題となる。一つの革命といい得よう。だから，転換は復興であり，また発展である」[19]，という記述内容や，あるいはまた「多かれ少なかれ，皆が戦争犠牲者であった」[20]，と山本がいう歴史的感覚，歴史観には，看過しえない重大な疑問が内包されると判断したからである。山本のいうように「問題の限定」を画するというならば，こうした論述内容を山本自身が自著の内容のなかに，わざわざ表現として，もち出す必要性はなかったはずである。

かつて，反ナチの闘士であった西独の元首相が，そのナチの過去における被侵略国に出向いたとき，その国の犠牲（者）に対し，謝罪の意を表わしたことや，物理学者が核兵器問題に対し発言している事実は，経営学を専攻するわれわれ社会科学者にとってけっして無関係でありえない言動を意味するものになるはずである。山本に問いかけ，考えてもらいたいことは，前段で指摘のあったような歴史認識の発露に関していえば，日本（人）以外の人種，民族，国家，体制になんらかの形で所属する者の立場からして，それ――山本の歴史観――は，とうてい認容も許容もできない，過去からの連綿たる歴史的経緯の状況のなかにおかれてきたという事実を，強調しておかねばならない，という点である。筆者は，山本に「ざんげ」など，少しも求めていない。歴史に関する認識，見方を，同じ経営学者として，社会科学研究に従事する者として，問題にするだけである。

昭和20年〔1945年〕3月10日未明――午前0時15分から――，アメリカ軍による日本東京の下町地域への大空襲は，われわれ学会の貴重な先達である，増地庸治郎の命を奪ったことを[21]，当該学会に所属する人士は，おそらくすべてが知っていることと思う。大変恐縮であるが，以下私的な話題にふれざるをえないことを断って，叙述をつづけると，筆者はその当時，まだこ

の世に生を受けていなかったが，筆者の一家――父，母，兄の三人〔姉もいたが宮城県松島に疎開中〕――も，その生地獄とさえいえる空襲による修羅場を生きのこり，そのうち兄は九死に一生というべき体験をし，生死の境をさまよってきた，という一事実を，あえてここに記しておこう。なぜこんな私的な話題をこうした場にもち出すのか。何年も前になるが，ある日本人の識者は，その３月10日大空襲の罹災状況を，都民の個人的回想をつてに記録にとどめ，後世にこれを残す仕事をなし，著作の公刊を行なっている。これは日本（人）の被害〔者意識〕の側面に重点がおかれた実録的な書物である[22]。日本人「皆が戦争犠牲者であった」ことになる。なぜ，筆者の家族が，その３月10日（旧日本陸軍記念日）の大空襲のなかにあったのか。

過去の歴史的認識に対する思想形成の方法において，山本には平衡感覚の偏りがある。こうした筆者の指摘は，日本（人）の知識人においても，筆者のいっているところを，ただちに諒解する人士の層がいるであろうことを前提にしての話である。以上の論述で意図され，拡延される意味合いは，現今の日本企業の海外進出における実状分析にも，なんらかの関連と含意をもちうる問題になろうことも，合点がいこうというものである。

満州の「建国大学」に奉職し，日本の敗戦により，ソ連に抑留され，強制収容重労働を体験した山本が「被害者」的発言をすること自体は誰も心情的にとめられない。一個人として，一人の人間として，当然の弁である。山本はいう。抑留当時は，「生命の危機を日々痛感し，遂には無感覚となるほどであった」[23]。だが，あの戦争にまつわる苦汁に満ちた山本の個人的体験は，歴史の流れのなかで相対化され，全体的な史的眺望において，客観的に評価を受け，位置づけなおされるべき対象といえる。社会科学者として，経営学者として，それだけの重大な体験が，自己の経営理論の展開に，経営学説の樹立に，いまひとつ創造的に再生されきっていない実態をみるに，以上の筆者の所感の表明――山本の歴史認識への――が，なんらかの意味関連をもちうることは，しごく当然と考えている。

歴史をもう少しさかのぼるに，日本のシベリア出兵〔1918年（大正７年）８月12日〕に参与し，「忠良な臣民」としての一兵士であった，松尾勝造の『シベリア出征日記』[24]を一読したとき，筆者は，山本と松尾の歴史認識のあり方の間に大きな懸隔を感じることができなかった。かたや忠良な一兵士としての臣民，かたや最高学府の〔当時〕少壮から中堅になりつつある経営学者，彼我の間に，歴史認識上の大きな差は存していない。忠良な一臣民としての松尾の方は，ひとまずおくとして，山本がこの松尾と大して変らない同じような認識圏域，水準にあるとすれば，これは社会科学者としての山本にゆゆしき問題をつきつけている。

山本が，戦前，日本の敗戦時まで奉職した満州「建国大学」について考えてみよう。すでに，1907年〔明治40年〕４月１日に開業された南満州鉄道会社に対しては，代表的な見解として，こういう議論が学問的認識としてある。

満鉄は，さまざまな政治的制約から会社形態をとったが，本質は満州における日本植民地支

配体制の基盤を強化すべき特殊使命をおびた国策機関であり，強大化するその全機構を通じて国内財閥大資本の共同的進出工作を国家資本により統括支配するという形で，満州各地に各種の資本輸出を推進し，やがてみずから鉄道業を基軸とする一大「満鉄コンツェルン」を形成するにいたった。この満鉄は広大な「鉄道付属地」という領土と「付属地居住者規約」という法律と，そして「鉄道守備隊」という軍隊とを具備した影の国家にほかならなかった[25]。この満鉄形成の延長線上に，1932年〔昭和7年〕3月1日の満州国建国宣言がある。この地に設立された大学＝アカデミズムが「建国大学」である。山本は，満州帝国政府編になる『満州建国十年史』——昭和17～18年ごろ執筆とのこと[26]—— の，第3部第8章「企業」〔535-594頁〕を担当，執筆している。そこで，山本が経営学的に論述し，主張する。以下，興味ある個所を引用し，参照しておこう。

満州国においては建国とともに世界史的に課せられた国民経済的課題の自覚，したがって国民経済における国家主体性の確立のゆえに，新たな出発の第一歩から国民経済的に重要な諸事業が国家の経営作用の下に立ち，しかも新たな企業形態において綜合的統一的計画的に設立され経営されてきたことをあげなければならない。……主体的形成行為の輝かしき成果にほかならない。この故に，個人主義的営利主義的な企業者の創意をではなく，まさにこれをこえた全体主義的国益主義的な経営者を通してのみ，この間における企業発展の真相を理解しえるといわねばならない[27]〔傍点は裴，以下の引用文でも同じ。なお，旧漢字，旧文体，旧送りがなは，すべて現代風にした。以下同様にする〕——引用①，とする。以下同じく連番による標記を付した——。

満州国における企業の発展は日本の精神的および物質的助力なくしては考えられないところである。……日本なくして満州国はありえないのである。日満一体関係は単なる標語にとどまるものではなく，真に生ける現実を貫く指導原理といわねばならない[28]——引用②——。

満州国は日本を親邦と仰ぎ，日本の世界史的課題をみずからの課題として自覚し，いわば日本の世界史的使命の分担者としてこれを遂行するものにほかならないからである[29]——引用③——。

真に主体的とは単なる主観的意志的ではなく，主体的基体としての意味をもつものでなければならない[30]——引用④——。

特殊会社そのものは珍しくないにしても，特殊会社が中枢的な企業制度として確立されたことは，まさに満州国民経済の根本的特質に属するといわねばならない[31]——引用⑤——。

満州国民経済が……実質的には国防経済であり，形式的には統制経済でなければならないことは，同時に企業形態が特殊会社でなければならないことをも意味する。……かくして公私企業の混合形態ないし折衷形態としての特殊会社が形成せざるをえない。……もっとも論

理的には公私企業の混合ではなく，真の統合としての新しい企業形態の可能性も考えられるが，……歴史的発展におけるひとつの限界をみないわけにはいかない[32]——引用⑥——。

満鉄の歴史は近代満州経済そのものの歴史にほかならない。……満州建国は満鉄の歴史にとりまさに画期的な課題を担うのである。……まさに千載一遇というべきである。……建国以来，あらゆる方面における満鉄の活路は壮観というほかない。ここに満鉄時代の出現はむしろ当然といわねばならない[33]——引用⑦——。

ソ連の対日抗勢，支那における民族運動の激化，英米の対日経済圧迫——こうした世界情勢は好むと否とにかかわらず，日本を駆っていわゆる準戦時体制の確立にむかって拍車せざるをえない。こうした情勢の故に満州の経済建設は重化学工業に集中し，しかもその建設速度の速かならんことを要求される。満州の独善的アウタルキー的方向は清算されて，真に日満経済の一体化が要求される。日満国防経済の確立が現実の具体的課題である[34]——引用⑧——。

今日では資本的連繋でなしに，経営的連繋こそが中心である[35]。満州の特殊会社の歴史がいかに短かく，経験がいかに浅いにしても，他国における貴重なる経営の経験を参照し，経営理論をとり入れて，みずからの道を開拓することはできるはずである。……しかし真に重大問題は人の問題である。……経営の合理化は根本的には歴史的形成の問題だとしても，それは歴史を担当する人の行為においてのみ可能である。……その世界史的大使命の達成を待望しつつ筆を擱く[36]——引用⑨——。

……全力をあげて大東亜戦争の遂行に協力するという新課題が負わされることとなったのである[37]——引用⑩——。

以上引用に①から⑩までと番号を末尾に付して，長々と参照してみた。こうした山本の満州「建国大学」においての現実に対する理論上の考究とその発言を，添えてある引用番号をもって，分類，整理してみると，①⑥⑨は経営（学）観に関する，②③⑦⑧⑩は政治的側面に関する，⑤⑧は経済的見方に重点をおいた，④⑧は哲学的把握での主張，というふうにそれぞれなる。⑧などのように，多面的な内容に関連するものもあるので，簡単な分類では終らない。したがって，それ以外の引用番号をつけた引用叙述も，一概には分類しきれない要素があるから，さらに⑧のごとき性格をもつともいえよう。

また，昭和16年に建国大学研究院から刊行された，山本安次郎著『公社企業と現代経営学』においては，山本はつぎのような見解を論述している。直接，引用してみよう。

国家の立場，国家的存在の論理の立場，いわゆる「行為的主体存在論の立場」すなわち「行為の立場」において……のみ現代的転換の基礎理論としての現代的学問を根拠づけるこ

とができる……。ここにわれわれの現代的課題が存在する……。この意味において，企業の現代的形態としての「公社」の問題はわれわれの経営学にとってまさにひとつの試金石たるを思わしめるものがある[38]〔旧漢字，旧文体，旧送りがなは，現代風にした。以下同じ〕。

経営学を根源的なる「行為的主体存在論の立場」，略言すれば，「行為の立場」において新しく基礎づけようとするにある。経営学を歴史的現実の根源的主体たる国家の基体即主体の自覚に立つ行為的立場から，単に方法論的抽象的にではなく，あくまで歴史的現実，行為的主体存在の世界において具体的に成立する現代経営学の性格において形成しようとするにある。この歴史的現実における危機を国家的根源的危機と自覚し，かかる危機を媒介に，近代的企業の公社企業への現代的転換を根拠づけ，同時に近代経営学の現代的転換を試みようとするにある[39]。

経営学が真に経営学であるためには，それは歴史的現実における経営行為の学，経営者の行為体系における経営原理の学，経営行為の原理の学でなければならない。したがって，問題は，存在法則か規範法則か，内在的立場か超越的立場かではなく，まさに存在法則と規範法則，内在的立場と超越的立場とでなければならない[40]。

いうまでもなく，「現代」へのかかる世界史的転換の曙光はまずかの満洲事変を契機とするものであって，まさに，光はアジアより，いな，日本より，といわねばならない。しかるに，今や，それは支那事変ならびについで起これる欧洲戦争を契機に真に世界史的規模に具体化したのである。現に，日本は日本精神即世界精神の自覚においてかかる転換期の指導者として偉大なる世界史的使命を担って立つのである。われわれは世界史の創造者として真にこれを担って立つ日本を自覚し，もって世界を転換せしめねばならない。しかし，世界の転換はアジアの転換において行なわなければならない。アジアの転換が同時に世界の転換を意味するのでなければならない[41]〔傍点は裴〕。

国家の根源的主体性の自覚に立つ行為的主体存在においてのみ実践的課題としてみずからの問題となる[42]。

経営学の現代的任務とはなにか？　……今日の世界史的転換期における大東亜の建設，同時に世界新秩序の建設，これが東亜を担えるわが日本の課題に属するのであるが，この課題と国力，とくに経済力との矛盾，ここに危機がもっとも端的に現われている。しかも，その危機は日に日に増大し，尖鋭化し，まさに脅威的な形態さえとって迫っている。もちろん，危機はこれを克服せねばならない。だが，しかし，それはいかにして可能であるか？　ここにいっさいの問題が集中する[43]。

筆者に対する山本からの，今回の，批判点である「問題の限定」――「日本・日本人は戦争犠牲者でしかなかったのか」という筆者の問いに対しての反論――とは，いったいなにをさす

のか，なにを基準にして，なにに限定すればよいのか，以上の引用内容を読み，考える者にとって，ことはますます不分明になり，混迷せざるをえない。以上の引用途述のなかには，やはり山本の筆者への他のひとつの反批判点である，主観と主体〔的・性〕――行為の立場における――のちがいという論点に関する山本の説明も含めておいた。また山本のいう，日本の世界史的課題，日本の世界史的〔大〕使命というものが，経営学の立場から「問題の限定」を，当然，山本が主張するごとく，受けるにせよ，その「問題の限定」の広がりは，多部面多分野にまたがる関連性を内摂し，その方途への可能性を現実に発揮している，と解釈することが順当であろう。その示唆するところは，きわめて広範囲にまたがり，立体的有機的な展望にまでつらなっている。たとえば，山本がいう「行為的主体存在論」「行為の立場」は，戦前にも戦後にも，新しい方法，立場として，対象への接近においては齟齬を感ぜず，それが「経営の論理」の機能たりうるという。「行為的主体存在論」の変幻自在さ，融通無礙性には，なにか大事な問題がないか，「主体の論理」としてその思想性において論理性が問われるべき要素がないか，検討を要しよう。

確かな事実として，山本をはじめ，日本・日本人，日本国は，山本のいうように「皆が戦争犠牲者であった」。ただし，そうした事実が存在したという点と，大日本帝国が侵略的，加害者的実在であった事実とが直接に混融，合体されて，相殺的に計慮されてはならない。これらは相互の批判の対象になりうるものであっても，両者の間に免責を生む因果関係をもちこむことは誤りである[44]。筆者が，山本経営学説について，またこれと西田哲学との関連について，いくつかの根本的疑問を提出し，山本のいう「本格的な経営学」説，同じく山本のいう日本経営学界の世界史的〔大〕使命に疑いを示し，最後にやはり山本がいうに，筆者が山本学説に対して否定的評価を下す[45]のは，山本学説と西田哲学の思想性や，山本理論そのものの基本性格を考究するさい，見逃しえない，社会科学者としての山本における「思想」的課題への対処法での曖昧さを，感得するからなのである。

要するに，山本は西田哲学がわれわれ――山本→日本の経営学界？――にとって唯一最善の経営哲学なのである[46]，と強調している。はたしてそうか，存在と価値，現実と理想など，あらためて次節で考えてみたい。

注

1）拙稿「≪山本安次郎『日本経営学五十年―回顧と展望』≫に関する書評的覚書」227-228頁。

2）山本安次郎「経営学と哲学との関連について」161頁，177頁。

3）同稿，175頁。カッコ内補足は裴。

4）同稿，181頁。裴「書評的覚書」228頁。

5）山本，同稿，183頁。

6）筆者の考え方については，「経営学方法論序説」，札幌商科大学『論集』第24号≪商経編≫昭和54年3月，『経営学の基礎研究』白桃書房，昭和53年，第1編「経営と風土の接点」を参照されたい。

7）岸本謙一「西田幾久太郎」『国文学解釈と鑑賞』第23巻第9号昭和33年9月。なお論題中，西田幾多

郎の姓名が西田幾久太郎となっているのは，もちろん誤記である。お話にならない誤りである。

8) 拙稿「書評的覚書」，231—232頁。

9) 山本，前掲稿，182頁。カッコ内補足は裴。　10) 岸本，前掲稿，42頁。

11) 山本，前掲稿，160-161頁。　12) 同稿，161頁。

13) 上田 久『祖父 西田幾多郎』南窓社，昭和53年，31頁。

14) 宮城音弥編 現代心理学 第4巻『人間性の心理学』河出書房，昭和29年，13頁。傍点は裴。

15) 同書，173-174頁。　16) 拙稿「書評的覚書」228頁。

17) 山本，前掲稿，188頁，注68)。　18) 同稿，181頁。

19) 山本安次郎『日本経営学五十年—回顧と展望』東洋経済新報社，昭和52年，113頁，注7)。

20) 同書，75頁。

21) 増地庸治郎『工業経営論』千倉書房，昭和21年，序文〔経営経済研究会〕1頁。

22) 早乙女勝元『東京大空襲—昭和20年3月10日の記録—』岩波書店，昭和46年。本書は，無差別爆撃に対する庶民の告発の書（同書，228頁）である。とともに，ここから民衆の戦争責任の問題も，あらたなひろがりと深さを持つにちがいない（同書，第11刷に当って，229頁）という戦争認識を行なっている。だが，後者の言明（229頁）が最近の新しい刷では削除されている。どうしてであろうか。

23) 山本『日本経営学五十年』75頁。

24) 松尾勝造著 高橋 治 解説『シベリア出征日記』風媒社，昭和53年。

25) 小林正彬・他6名編『日本経営史を学ぶ2 大正・昭和経営史』有斐閣，昭和51年，201頁。

26) 満州帝国政府編『満州建国十年史』原書房，昭和44年，瀧川政次郎稿「序と解題にかえて—追憶と感想—」1頁。京都大学『経済論叢』第100巻第5号昭和42年11月≪山本安次郎教授記念号≫の「山本安次郎 教授 略歴」によると，山本稿の第3部第8章「企業」は，昭和16年8月に完稿とある。

27) 同書，551頁。　28) 同書，551-552頁。　29) 同書，552頁。

30) 同書，553頁。　31) 同書，554頁。　32) 同書，554-555頁。

33) 同書，558頁。　34) 同書，562頁。　35) 同書，587頁。

36) 同書，593-594頁。　37) 同書，591頁。

38) 山本安次郎『公社企業と現代経営学』建国大学研究院，康徳8年9月〔昭和16年〕，はしがき1頁。

39) 同書，同2頁。　40) 同書，同4頁。　41) 同書，3頁。

42) 同書，4-5頁。　43) 同書，6頁。

44) 松尾，前掲書，高橋≪解説≫28頁。山本にとって，つぎのような日本人識者の見解は無関係ではないはずであろう。すなわち，私自身をふくむ日本の〝民〟は，全体としては，「強国」政府の命にまことに素直に，もしくはやむなく従って，ヨーロッパの「強国」と懸命にたたかい，それによって互いに弱め合ったこと，またアジア諸民族に対する差別と抑圧，その他もろもろによって，その憤怒と抵抗をかきたてた，ということによってのみ，アジア諸民族の解放に〝貢献〟してきたように，私には思われる（小島晋治『アジアからみた近代日本』亜紀書房，昭和53年，84頁)。

45) 山本，前掲稿，160頁。　46) 同稿，178頁。

Ⅳ 社会科学者の学的任務

—— 社会科学としての経営学 ——

山本は，戦前に展開された西田哲学に立脚して展開する「行為的主体存在論」によって，戦後においても経営の立場の問題を対象にして研究を行ない，しかも，そこに「齟齬」を覚えず，新しい対象には新しい方法が開発される，新しい方法によって新しい対象が研究される，それ

がその「行為的主体存在論」の立場であり，「経営の論理」の機能である，といっている。筆者がこの〔山本〕私見における方法と対象の関連問題について，その「齟齬」を批判したつもりなら，以下の理由により，そうでないという[1]。つまり，山本によれば，経営の学としての経営学が，経営変動に応じて変化し，時代性ないし歴史性を示すのは，当然である。哲学についても同様なことが，いちおうはいえよう。しかし，哲学が科学と同じ程度とはいえず，とくに真実在に論理的にせまろうとする，いまや「古典」ともいうべき西田哲学については，ある程度，歴史的普遍性を認めてもよいと思う。時代に適応する弾力性をもつからである，ということになる[2]〔傍点は裴〕。山本の，歴史に対する「感覚」観，歴史認識が，再度問われなければならなゆえんが，いみじくもそこに開陳されている。そこでは，歴史性と論理性をとりもち，むすびつけている思想性に関して，なんらかの社会科学的究明を受けるべき問題がありそうである。問題の鍵はこういう具合に表現できようか。西田哲学＝「古典」が論理性において，ある程度の歴史的普遍性を認知されるから，それが時代に適応する弾力性をもつことになる。ここから「西田哲学」の経営哲学としての秀抜性が，山本の主張するような経営（学）の立場として認められるか，なお疑問がある。筆者が，山本に対して，絶えず問題にしてきた点は，西田哲学の「古典」的な歴史的普遍性がもつという，その時代への適応力，弾力性を，その保持する「論理性」だけでなく，加えて「思想性」との関連で再考する必要があるということであった。しかし，この問題意識はあくまでも筆者の立てるそれであって，山本には通用しないらしいことが，今では判明している。

山本は，筆者の書評や書評的覚書における批判と，また筆者へ返す山本みずからの「反論」との関係，対面を，「論争にならぬ論争」――批判に対する弁解ともとられる論争――でしかないという。というのも，筆者の挑戦〔果し状〕に答えてみて，論争というべくあまりに貧弱であり，不毛であったことを，悲しまなければならないからという[3]。しかしながら，山本も述べているように，日本の〔経営〕学界では，論争らしい論争を「本格的」に経験しえていない理由をもって，あるいは論争らしき論争でも，その結果が貧弱で不毛になる事態や可能性が，なきにしもあらずといえよう。筆者と山本との論争に関しては，山本の筆者にする，「西田哲学」理解が未熟，山本学説の読みが浅い，等々の指摘とは別に，日本の経営学者として，論争そのものにおいて，訓練――ルールの習得――が足りないことを，あらためて自覚したいところと考える。

日本（人）の思想問題としていえることは，いままであまり対決をしてこなかったため，日本固有の思想と，新しい外来の思想とを，二つの契機として，それを綜合する新たな思想が生まれていないことである。ここにいわば，非弁証法的思考形式のひとつの特性がある。すなわち，日本人の精神構造の問題点として，自然主義，現世主義，情緒性および非弁証法的思考形式をあげなければならない[4]。「論う（あげつら）」「言挙（ことあ）げ」すること――批判や論争――を好ましいとし

ない，場合によっては，そうする人間を，なにか人格上，品性に問題があるかのように嫉視する，この国の精神的風土は，学問的風土の上にも，非常に大きな影響力を確実に及ぼしていることと考えられる。

山本にとって，自己の経営（学）研究の歩み，進展の経歴自体が，いかなる存在的意議をもち，また経営学者としての自分にとって，どのような，対社会的，対歴史的なかかわりがあったのか，大した問題ではないらしく，絶えず，強調されることは，自己の学説理論が西田哲学による経営学研究方法として，世界史的使命があるという自負と確信である。日本人は，「認識，受容，解釈」には強いが，「根源的な原理への問いかけ」，すなわち「存在そのものへの問いかけ」，「あるとしてのあるの，根源への問いかけ」に乏しく，弱かった。いいかえれば，日本人には，伝統的，歴史的，風土的，そして「環境・構造」的に，「ある」が問われることが乏しかったのであるし，そして，今でも，この「あるとしてのある」があまり問題にされることはないばかりか，むしろこういう問い自体が不可解なのであろう。これは，本性的というより文字通り，「環境・風土」として，そして「構造」的に不可解なのであろう。したがって，哲学・存在論が，また不可解であり，そして，たとえ，それが問われることはあっても，「存在的」「主語・主体的」「実在的」でなくて，「観念的，抽象的」となる傾向が強いのである[5]。こうした哲学上の論理的な日本人の存在（論）的把握が意味する内容を，山本みずから，どの程度，思惟し，内省しえているのか，これに透徹し，根底にふれうる，「経営（学）の立場」の形成努力を，いかほど実行しえているのか，大きく疑問を残している。山本の戦争体験を通して放たれる発言は，その意味で「問いかけ」の意識があまりみられない。これをいうならば，日本人は，その「あわれ（哀れ）」の問題を，「自己のあわれ」とせず，「もののあわれ」としてしまい，われ自身のあわれなのに，あわれを見る立場にしてしまう。自分を眺める立場におき，あわれさから，自己を解放するのである[6]，という認識から，山本も少しも離れていない，というほかない。

西田哲学を経営（学）哲学として生かすという山本に対しては，日本人にとって，「人生の想い」は単に20世紀前半に生きた，西田一個人の問題につきるものではなく，西田の思想を日本思想史全体の文脈のなかですえなおすことなしには，解かれえないだろう。したがって，また西田研究は日本思想史全体の文脈の確立を，不可欠の条件として，逆に要請する[7]，といわれるとき，経営学として西田哲学に依拠するという山本の場合，思想史→歴史性の問題→山本の体験〔存在の歴史〕の文脈のなかで，その関連〔哲学と経営学の〕問題を考えなおす必要があろう。戦争にまつわる諸体験に関した山本の発言，見解は，この見直し，洗い直し作業の必要性――山本がこれを不必要と認識し，拒絶するなら〔→「問題の限定」〕，他者がすべきもの――を，示唆している。

みずからの特殊性を特殊性として知ることによって，みずからが主体を乗りこえ対象化しよ

うとする努力によってのみ，西田の意義は計られる[8]，という観点は，山本には存在しない。西田哲学によれば，日本経営学（界）の世界史的使命が，突如として現出し，経営学の固有の立場が即座に確立され，その自律性の基礎が，いっそう確固となるらしいことが，主張されるのみである。C．I．バーナードの理解も西田哲学の主体の論理，実践の論理によってはじめて基礎づけられ，発展せしめられ，つねに新しい時代に適応するものとなる，という[9]。確かに，山本のいうように，真理には西洋も東洋もない[10]かも知れない。しかし，これはごくごく一般論である。山本の経営学説は「日本的」経営学であり，また「日本の」経営学でもある。西田哲学によっている事実が，かえってこのことを強めている。だが西田哲学は，明治以後，世界のなかに投げ出された日本人の運命を確かに引き受けていた。彼の哲学が，明治以後ほとんど唯一の独創的体系とみなされているのは，まったくこのゆえにほかならない[11]。しかし，絶えず新しい時代への哲学として，西田哲学をそのまま利用しつくせるか，なお「哲学」的問題を残そう。問題は，西田哲学の現実性にある。西田を問題とするかぎり，この現実性だけが日本人に支えられている[12]，とすれば，今一度，現在の時点で，西田哲学は西田哲学なりに，また山本学説は山本学説なりに，再考を根源的に受けるべき余地があるはずである。

西田哲学は，その論理も文体も，まことに日本的であって，日本人の読者には通ずるが，世界的普遍性を獲得することは困難なようである。ということは日本語による思惟が，よほど特殊的で，孤立したものになっているからではないか[13]，といわれ，また西田哲学はキリスト教の哲学に対する仏教哲学ないし東洋的世界観を基礎づける論理だといいうる[14]，と断言されているのに，「真理には西洋も東洋もない」という山本の言は別問題にしても，西田哲学が，またそれに依る山本の経営学説――経営の立場と経営学の立場とを西田哲学的に思考するという――が，「日本的」でないとはいえまい。

山本は，西田哲学を限定して，経営哲学と読みとることは必ずしも容易ではない[15]，と述べる。また，「行為的主体存在論」の立場と名づける見地から，西田哲学を「経営の論理」――経営存在の論理――と同時に「経営学の論理」――経営思考の論理――にほかならない，と主張する[16]。この現在の山本の立場に対し，三戸　公が，規範・理論・技術の問題をすっかりぬかしている，どうしてこれらの問題を取り上げることを〔かつての時――規範学説を批判していたころ――とはちがって〕やめたのか，という疑問を提起している[17]ことは，注目される。山本学説の論旨展開とその歴史的変遷には，他者をして，明解ならざる内実があると読むほかない側面が，暗黙的に示されているとしかいいようがない点がある。

西田哲学の生命は，実存的自覚の場所を論理的に明らかにしたところの，「逆対応・逆限定」の思想を焦点とする哲学的論理学としての，「場所的論理」の形成にある。それゆえ，この「逆対応」の実存論的論理を「場所的論理学」の中核的発条としながら，これをきびしく今日の社会科学の成果によって媒介しなおすことに，西田哲学の残された課題がある[18]。したがって，

西田の哲学がマルクスの哲学と異なるのはいうまでもないが，それはまた，マルクスの哲学と深く響きあうものをもっている。西田哲学もまた近代哲学の地平をはるかに超えている[19]。そこでは哲学と社会科学はどのようにして手をむすび，協力しあうことができるだろうか，あるいはまた，そこでは，思想と科学はどのようにむすびつき，たがいに補完しあうことができるだろうか。こうした性質の問題は，社会科学にとってもっとも基本的なもののひとつなのである[20]。換言するなら，深く解釈されたマルクス主義なるものが，自然弁証法や史的唯物論を含むかぎりにおいて，唯物論の立場からする世界観を樹立しているのと同じように，西田哲学もマルクス主義の理論をも取り入れた雄大な世界観を樹立している。西田哲学は，その意味で東洋的とか西洋的とかいったような差別を超えた，真に独創的な現代哲学であるといっても過言ではない[21]。このように，その点〔独創的現代哲学として〕では，西田哲学は世界哲学としての，日本の，日本的哲学である。マルクスの哲学が世界哲学として，ドイツ的，ドイツ人的な哲学であったように，そうである。

こうした哲学的位置づけを獲得しうる西田哲学を経営学とむすびつけ，経営学の哲学的基礎づけ，逆には哲学の経営学的具体化という，哲学と社会科学の架橋となる，理論作業を追究しようとしている志向性が，山本の経営学説には的確に内在する。このことは，山本学説に対し，筆者が，現在もなお，高く評価し，首肯する志向性である。またこのことは，山本がいうような，筆者のする山本学説への評価が肯定的から否定的なものへと変化したこと——これが山本「反論」の語調の激烈さを高潮，惹起させた間接的誘因かも知れない点は，すでにふれたが——とは関係なく，筆者が山本を肯定する局面，要因なのである。

山本が，西田哲学の「古典」というべき点において，ある程度，歴史的普遍性を認めてよいと思うと述べていることには，先に論及した。だが社会科学である経営学として，その「古典」を現代に，ただちにそのまま横すべりさせて適用するだけにとどまってよいのか，この論点について，筆者は山本の経営学説の方法と内容に関し，重要な問題性を感じ，この局面では，山本学説に対して否定的な評価を与えざるをえないのである。筆者は山本の経営学説の解明を，ただ，肯定的から否定的な評価へという単純な移行連関という意味合いでのみ行ない，展開してきたのではない。

西田幾多郎は資本主義社会を論じても，そこに単に弁証法の一例をみるにとどまっている。このような姿勢がやがて国家主義への屈服につながる理由となった。それは彼が，マルクスの弁証法を自分のそれに近いと考えても，マルクスの弁証法を真に明らかにするためには，社会科学そのものの研究を通してなすのでなくしては不可能であり，なによりも『資本論』の研究を媒介とすべきであった，といわれている[22]。山本が心密かに「資本論」から「経営論」へという念願を抱き[23]，経営学の社会科学的次元における具体的理論の展開を試みた点は，躊躇なくそれ相応の評価を与えてよい。この意味で否応もなく，筆者は，今もなお変らず，山本学説

の方針自体＝志向性そのものについては，高く評価しており，またそれに肯定的である。

だが，「本格的な経営学」理解の鍵となり，これを可能ならしめるのが西田哲学であり，経営哲学として西田哲学が生かされるというさい[24]，西田哲学の哲学としての現代的な根本問題に無頓着，無意識的であるばかりでなく，これを経営学的な方途で解決し，現代的な展望において，企画する問題意識もなく，むしろ西田哲学の問題性をそのまま平行移動させ，経営学的にただそれを現代的に再生産，再登場させているだけとすれば――これが筆者の山本学説解明の進捗にともなって加わった肝要な分析結果である――，筆者の山本への評価は否定的なものを重ねるほかない，ということになる。だから断っておくと，山本学説の意図，構想自体のすべてを否認し，拒絶しようとする解釈が，結果的に判断して，出てはいないし，けっしてそうなるとはいっていないのが，筆者の山本理解になる。

西田哲学の基本的な特徴は，なによりもまずそれが，徹底的に包括的な学説であることである[25]。これは，山本の経営学説を知る者，皆が，たやすく認容することがらになるといえるが，いわく「本格的な経営学」としての日本経営学界の「世界史的使命」という宣言のたぐいは，その西田哲学が有する，哲学上の基本特徴と直結しうる主張である。山本学説の特質は，欧米学説〔プラス日本学説〕に対峙して徹底的に包括的な学説であることにある。

やや抽象度を増して考えよう。西田哲学が，身体をもって行為する自己の立場に立ち，その自己の主体性と自由，およびそれの根拠を明らかにし，世界の主観的・客観的構造を解明するうえで，大きな寄与をもたらしていることは確かであるにしても，その「無」の立場が「永遠の今」の直観において心境にとどまるに終る制限をもつことは，やはり否定できない。だが，このような制限にもかかわらず，西田哲学の「行為的直観」の立場が行為の論理，創造の論理の地平を切り拓いていることは確かで，西田哲学の巨大な意義はそこにある。そして，その行為的直観の立場に根源的な意義を認めていることは，きわめて重要である。行為的直観はいわゆる直観主義ではけっしてない。直観は幾重にも媒介されていなければならないが，媒介の立場はどこまでも反省の立場であって，そこからは創造的な行為の立場は出てこない[26]。西田のいう「最も直接な最も具体的な立場」とは「行為的自己」の立場のことであろう。しかし西田は「行為的自己」の立場から「実在」を，「歴史的社会的実在」としてとらえようとしながら，社会の構造と過程とを解明できなかった[27]。山本においても，以上の叙述中で筆者が傍点をつけて強調した語句内容にとどまらず，そうした西田の問題が，ただ単に経営学的に再現されているにすぎないという性格を脱却しえていないかぎり，筆者は，山本の立場や構想そのものに対しては肯定的でありうるものの，その理論の具体的展開における諸主張内容のあり方には否定的な見解をもたざるをえない。

本稿のここまでの論究をよくふまえながら，さらに考えてみたい。西田哲学には，まだいくつかの重大な論点が問題としてある。たとえば，西田哲学には，疎外の自覚と回復への運動の

論理が欠けているところに，大きな抽象性があるといってよい。しかし同時に，それが人間存在の精神的な根本的理法をきわめて精密に規定している功績を無視してはならない[28]。また，西田哲学において，実在の形式は矛盾的自己統一的に運動するのであるから，歴史的世界がもっとも具体的な形式だということができよう。だが西田はここで，論理的な歩みをまるでとめてしまって，いきなり飛躍してしまう。こういうふうに，論理と対話の運びの約束を無視するところに，西田の判りにくさの最大の理由がある[29]。西田哲学は，実在の根本構造を正確に規定しながらも，それの頽落形態ないし悟性的契機の追求と，両者の基礎的な連関の解明を欠く点で，現代哲学として重大な欠陥を示している[30]。問題はそれだけでない。実は，西田が「絶対矛盾的自己同一」と論理学的に言詮(ごんぜん)したものに，事実の根源的な分析において，いまひとつ不明瞭ななにかが残っていたのではなかったか。哲学と宗教との根本にかかわるこのより重大な問題は，社会科学的媒介云々の問題とも，からまっているのである[31]。

このような西田哲学の諸問題，すなわち，疎外の自覚と回復への運動の論理の欠除〔山本では「戦争体験」の把持〕の問題，歴史的世界における論理的歩みの停止〔山本では歴史的世界における論理性に対しての思想性問題の放棄〕の問題，実在の根本構造における頽落形態ないし悟性的契機の追求と両者の基礎的な連関の解明〔同じく，西田哲学の経営学への直輸入〕を欠く点の問題，事実の根源的な分析で不明瞭ななにかを残す〔山本における「日本的経営」問題への対処法〕問題，哲学と宗教の根本にかかわるより重大な問題，これと社会科学的媒介の問題〔山本での，西田哲学の「論理性」の方向への換骨奪胎化〕，などは，なお今後のわれわれの問題群といえよう。さらに，山本における今回までの「論争」にむける姿勢は，「論理と対話の運びの約束を無視する」性向が強い，といえよう。筆者の論調を≪感情論≫として，排斥しようとする態度が，そこに因をもたなければ，と願うだけである。このように，これまでいくつかの論稿において筆者が，つとに指摘しておいた山本の経営学説上の問題点が，西田哲学と社会科学としての経営学との関連次元の問題として，出現している，という指摘は，依然，残置されたままなのである。

日本的な国学が，一民族一国家〔筆者はこの表現に異議があるが……〕という特異な歴史を歩んできた日本人の，生のあり方の根底に流れる価値姿勢，日本文化の特性を問い，かつこれを再確認して，みずからの生に歴史と伝統の息吹きを再生させ，刻々と変化する生の条件下に，新しい展開と成長を可能ならしめるような目的価値の発見を目的とする学問と考えられるとすれば，それは自己認識，自己再発見，自己同定のための学問であるにほかならず，したがって方法的には学問的客観性をもちながら，目的的にはけっして客観的でありえないという性格をもっている。そこに研究者の情念がかかわってくる。信仰と科学の両立といってよい問題が，そこにある[32]。

しかし，山本学説が，その信仰と科学——西田哲学と経営学——を，そつなく両立しうるよ

うに，経営学としての〔経営〕「行為的主体存在論」を，理論の樹立と論理の展開とにおいて成就しえているか，それにまた，日本の経営現実との対峙の問題においても，なお現在，疑念は大きく残存されたままにある。

注

1）山本「経営学と哲学との関連について」180頁。
2）同稿，180頁。　3）同稿，183頁。
4）小林公一・三浦 正『日本人のニヒルと無』ヨルダン社，昭和42年，183頁。
5）岡崎公良『「ある」の構造』新樹社，昭和53年，83頁，315-316頁。
6）小林・三浦，前掲書，186頁。
7）一柳富夫「西田哲学の難解さについて」『理想』<特集「日本の哲学思想」> 第476号昭和48年1月，44頁。一柳は他所で，こうもいっている。西田にとっての解決は，おそらくそのままわれわれの出発点となる以外ない……。われわれにとって問題なのは，彼が終始抱きつづけた問題意識そのものである。（古川哲史編『日本思想史要説』博文社，昭和53年，〔一柳富夫稿 22「西田幾多郎における『人生』の問題」〕275頁）。
8）一柳，前掲稿，45頁。　9）山本，前掲稿，171頁。　10）同稿，185頁，注29）。
11）一柳，前掲稿，44-45頁。　12）同稿，44頁。
13）勝部真長『日本思想の分水嶺』勁草書房，昭和53年，8頁。
14）鈴木 享『西田幾多郎の世界』勁草書房，昭和52年，249頁。
15）山本，前掲稿，170頁。傍点は裴。
16）同稿，同頁。
17）三戸 公『経営学』同文舘，昭和53年，40-41頁。
18）日本思想史講座 第8巻『近代の思想3』雄山閣出版，昭和52年，274頁。
19）竹内良知「西田哲学と私」『理想』第536号昭和53年1月，84頁。
20）高島善哉『マルクスとヴェーバー』紀伊国屋書店，昭和50年，249-250頁。
21）樺 俊雄「わが青春—西田幾多郎への傾倒」『現代の眼』昭和54年4月号（第20巻第4号），217-218頁。
22）鈴木，前掲書，76頁。
23）山本安次郎『増補経営学要論』ミネルヴァ書房，昭和43年，序4頁。
24）山本，前掲稿，165頁。　25）鈴木，前掲書，12頁。
26）竹内良知『西田幾多郎と現代』第三文明社，昭和53年，167-168頁。傍点は裴。
27）竹内良知「西田哲学と私」84頁。傍点は裴。
28）鈴木『西田幾多郎の世界』139頁。傍点は裴。
29）同書，148頁。傍点は裴。　30）同書，162頁。傍点は裴。
31）日本思想史講座，前掲書，275頁。傍点は裴。
32）内野吾郎・戸田義郎『民族と文化の発見』大明堂，昭和53年，124-125頁。

V　む　す　び

今回，まことに幸運にも，山本安次郎から筆者の山本経営学説の解明を試みた諸「論稿」に対する反論をもらい，当事者双方の問題意識や分析視角の相違が，いかように存在するのか，極力，客観的に究明する努力を保持する方向で，山本からの「反論」論稿の主張内容を，本稿

において考察してみた。再度本稿は，山本の今回の「反論」への，そのまた「反論」や「反批判」を意図するものではないことを，とくに注記しておきたい。

山本側から，「論争にならぬ論争」と受けとめられた，今回の，本稿も含めた学問的交流が，いくらかでも成果をあげえたか，まったく自信がないところと考えている。山本の論調，というよりも，その語調，語気としては，自己の学説主張，経営（学）の立場を，他者がそっくりそのまま，同一になって理解しうるか否か，あるいは他者がこの立場そのものを採用するか否かが，経営学研究の価値を左右する唯一の判定上の「絶対的」尺度となっているわけであるから，これに対しては，学問的に遠慮，呵責などなしに，筆者なりに痛論を加え，全体的には，筆者の評価が，一方で肯定的な評価を含みながらも，他方でなお，強く前面に否定的な評価を打ち出している，という様相を呈している。筆者による山本学説の解明と批判に対しては，御覧のとおり，山本から，強烈ではあるも，必ずしも理論的で論理的，かつ理性的たるをつくしているとは受けとめきれない，「反論」が提出されている。少なくとも，この筆者の論稿によって，山本と筆者の間に横たわる学問的理解での深い溝の底にある諸問題に，光をあてることができるとすれば，本稿の存在意義がいくらかでも顕現してこようというものである。

山本学説への他者からの批判的考察に対して，山本から「誤解」とか「理解が不十分」という反論が出される場合が，頻繁にあるのはどうしてであろうか。これは，山本からする反論におけるひとつの型（パターン）である。どうも，山本学説の核心部分にせまりうる論究が少ないようである。筆者の努力とて，山本によって，同様に評価されている。

山本学説の明白な問題点として，具体的にもっとも明瞭なのは，経営の研究が経営学の研究に対して，量的にも質的にもきわめて不均衡で少ない点である。つまり，欧米の経営は視界外の問題として，「日本の経営」そのものの研究が，山本では決定的に不足ないし欠如しており，その〔経営の立場と経営学の立場の〕相互媒介的統一や相即をさかんに説く山本において，ひとつのアキレス腱とでもいえるべき問題点にならないか，という筆者の基本的疑問がある，ということである。この筆者の問題指摘に対して，山本は，量の問題は質の問題であるゆえをもって，また経営の立場に徹すること以外に経営学の立場の確立はないことをもって[1]，さらにまた，経営学の立場と経営の立場との相即，経営学史と経営史との相即にせよ，思考過程と表現過程とは異なるので，経営史的思考を単に前提し，その記述を省略したからといって，この場合，当然として許されるであろう，と述べる[2]。西田哲学の現実性が現代的に問われているというときに，その思考方法を経営（学）研究方法にすえる論者が「経営の立場」的問題そのものの現実的考察は相即的に前提され，省略を許されようとみずから主張する点について，筆者は根元的な疑問をもつ。

しかし，ここでは，業績・論著[3]のないところに評価はない，表現のないところに思考は読みとれない，と直截に即物的にいうほかない。西田哲学的にそれが省略されえ，許されるとい

う論理は，詭弁まがいの主張になりかねず，山本以外の他者には，はたして十二分に納得がいかない，筆致によるものというほかないだろう。社会科学者として，経営学者が理論を主場所にして「現実問題」を取り扱う方向性は，当然のことであるが，このこと自体，山本ではあまりにも些事的課題にしかなりえていないのである。

かつて山本は，すでに本稿が言及したように，満州の建国大学時代の論稿中で，経営政策（論）的に満州経営における経営問題に，現実的で積極的な提言を行なっているが，その結末はどうなったのか。この問題は，「問題の限定」を経営（学）の領域に画して解明しうるのか。

現代にあっての山本理論が，現今の「日本の経営」の諸問題にとって，「原理論」的にみていかなる意義と価値があるか，とくと考えてみるべき論点，課題となろう。社会科学者は現実問題にどのようにかかわるものであるか，なお相即的に経営の立場と経営学の立場を相互媒介的に統一し綜合するという山本の，決定的といえる確信の披露である，「行為的主体存在論」は，論理として，理論として，さらに理性の保持，矜持として，不明確な論点を完全に除去しえている「主体の論理」とは，とてもいえない。つぎに本稿の究明〔山本理解〕に関連のある叙述を二つばかり，引用，付記しておく。いずれも，「規範学説」としての山本経営学説にいわれるものである。

経営経済学は価値関係，つまり目的―手段に関する陳述である。経営経済学は経済的手段が倫理的に価値があるものか否かについて科学的に基礎づけられた判断を与えることはできない。というのは，経営経済学にはそのような判断が真実性において保証される手段が欠けており，この判断を信じることも信じないこともできるからである[4)]。

高度に規範的な組織の世界においては，話し手の観点からみて記述的であるべく意図された命題が，聞き手の観点からみて，記述的でありえないことをつゆ忘れることはできないはずである……[5)]。

最後にさらにいくつか，論点を詮議しておき，本稿のむすびにしよう。

まずはじめに，筆者が，山本の経営学説には「誤解」を生じさせやすい体質が内在，具備されている点を指摘し，したがってその責の――山本学説に対してよくある，山本自身がいう「誤解」の――一半が山本側にもあろう，といった論及をとらえて，この筆者の「開きなおる」論及は，「盗人にも五分の理」ということらしい，と山本は筆者を痛罵する[6)]。「論争」においては，そのような譬えも使えるものかという感慨無量なおももちである。しかしこうした表現方法は比喩的用法によるものと推察されるとはいえ，この点は先達より「盗む」ことのないように自戒いたしたく考えている。

つぎに，筆者の『日本の経営学』（河西，昭和52年）への寸評として，山本からその意気ご

みだけは壮とするも，はたして題名に値するか，おそらく問題ともならない，という評論をもらった[7]。いずれ，その題名に恥ない，壮に壮たるべく，内容の改訂，充実作業を試みる計画は，同書の刊行と同時に思いいたっていたこと，申し添えておこう。漸次，その準備を，筆者は積み重ねつつある，と中間報告しておく。

なかんずく，山本は，自分の「行為的主体存在論」が，筆者において，「結局理解できないということであろうか。理解した上でのことであろうか」[8]，と自問的に，筆者に反問しているが，これは，他者が，山本の自己の立場を「理解しえた」としても，それを「理解しえない，できない」場合があるという事態を暗示する，と解釈しておくことにしたい。

山本とは，全然，学問上の立場，方針が異なり，多分，水と油のような関係にある論者が，つぎのようにいう点について，山本がなんと評言するか，興味津々というところであろう。

> ある人はどうもはっきりしない。また，ある人は，たとえば，山本安次郎教授などは，やたらに，カント，ヘーゲル，西田哲学などの言葉を引用しその博識振りを示すことによって自己の経営学をさも立派な科学たらしめようなどという装いを凝らして徒らに美辞麗句を並べたてているが，要すれば，哲学的には観念的立場に立脚し，あるいは，具体的には，多くのドイツ経営経済学者のように，新カント派の没価値的的な考え方を推し進めているに過ぎない。
>
> …… …… …… …… ……
>
> それ故に，筆者が学生諸君にいいたいことは，この派の人々の経営学は決して読む必要もなければ，また読めば甚だしい毒素の悪しき感染をうけるであろうことを警告したいこと切である。読んでも中途半端で何にもならないからである[9]。

ここで，加えて，山本側からの自己の経営学に関していう，確信の披瀝を聞いてみておこう。

> 要するに，経営を経営的世界において行為的主体的に考察するとき，換言すれば経営の現実に即して考察するとき，さらに換言すれば経営の論理に従い「行為的直観」的に考察すれば，必然的に経営の経営的考察が可能となり，本格的な経営学への大道が展開されることとなるのである。ドイツ経営学とアメリカ経営学との統一を可能にし，本格的な経営学の確立を約束する道はここにしかないのである。一人でも多くの人がこの道に開眼されることを期待したいと思う[10]〔傍点は裴〕。

こうした山本の，西田哲学に「帰依」することにより，開眼されたとする「本格的な経営学への大道，確立」の着想・立論は，つぎのような時代背景の下で換起したものであった。つまり，日本経営学の戦前史〔1926-1945年〕後半期においての話である。

華やかな前期に比し，後期は準戦体制から次第に戦時体制に移行し，経済統制が強化され，激化する戦争の影響もあって，自由な研究や発表もとかく妨げられ，外国文献も杜絶えて研究は停滞しがちとなり，さらには中止のやむなきに至り，極く少数の人びとのみが自己の道を守り，沈潜することが出来たのである。著者〔山本〕は大学時代の恩師で建国大学副総長作田荘一博士（1878-1973）に招かれて昭和15年春から満州建国大学に奉職，同僚の哲学者や経済学者とともに『哲学論文集』によって西田哲学を本格的に勉強する機会をもち，西田哲学をどうやら理解するとともに，新カント学派と袂別して，ここに初めて本当の経営学の哲学的基礎に逢着し，開眼の喜びにひたることが出来た[11]〔カギカッコ内補足と傍点は裴〕。

この成果は，拙著『公社企業と現代経営学』（建国大学研究院，〔康徳８年９月〕昭和16年）となった。また拙稿「経営学と西田哲学」『彦根論叢』第164・165合併号（昭和48年11月）もこれを語るものである[12]〔カギカッコ内補足は裴〕。

ともかく，同学の老大家が，筆者に，わざわざ精力をさいて「反論」論稿を恵んでくれたという光栄には，満腔の謝意を表するしだいである。しかし，学問的舞台での「論争」へのかかわり方としては，不躾といっていいくらいに，いうべきことはいうべきこととして，容赦なく「論及」した。これが，違大な先学からの学恩に，答えるせめてもの精一杯の，至上の返礼と考えるしだいである。

注

1）山本「経営学と哲学との関連について」175頁。

2）同稿，188頁，注62)。この山本の見解に関して，つぎの山本自身の記述するところが，どう関係してくるのか，さらに考えてみたい対象となろう。「本質論が重要だとしても，……経営学そのものは前進しない。われわれはむしろ実質的な経営研究に努力し精進しなくてはならない」（平井泰太郎編『経営学』青林書院新社，昭和40年，〔山本安次郎稿 第２章「経営学の本質」〕65頁)。

3）山本「経営学と哲学との関連について」，186頁の注40）において，「日本の経営」を論じたとする論稿四篇を枚挙している。

4）Günter Wöhe, Methodologische Grundprobleme der Betriebswirtschaftslehre, Verlag Anton Hain K. G. Meisenheim am Glan, 1959. 鈴木辰治訳『ドイツ経営学の基礎』文眞堂，昭和52年，119頁。

5）今村都南雄『組織と行政』東京大学出版会，昭和53年，146頁。

6）山本「経営学と哲学との関連について」179-180頁，187頁，注60)。

7）同稿，184頁，注８)。　　8）同稿，187頁。

9）山田一郎「経営学本質論—経営学は科学たりうるのか—」『専修経営学論集』第22号昭和52年３月，38-39頁。

10）山本安次郎「経営学と西田哲学」『彦根論叢』第164・165合併号昭和48年11月，49頁。

11）山本安次郎『日本経営学五十年—回顧と展望』東洋経済新報社，昭和52年，48-49頁。

12）同書，同頁，脚注。

1979. 3. 28〔筆者が生を受けてから，32年目の日〕

1979. 4. 5〔補筆〕

（べえ ふぎ。経営学専攻）